

田中六助氏（元大平内閣官房長官）に聞く

歴史の使命を果たした人

―聞き手・編集委員



新宿御苑において行われた「首相主催の観桜会」で。
大平首相と志げ子夫人、右に田中内閣官房長官（1979
年4月12日）

大平総理に私淑された理由

—— 田中さんは、早くから大平総理に私淑され、大平政権樹立を目指してこられたわけですが、それはなぜですか。

田中 私が大平総理に私淑し、その政権の成立を、ひたすら願ったのは、大平さんが、歴史の使命を果たす人であり、資源に恵まれぬわが国が、二十一世紀に向かう彼方を、必ず、希望でつなげうる人と、確信したからです。池田勇人総理時代から、大平内閣成立までの長い苦しい道のり。大平さんは、時に淡々と、そして、時に耐えて、宰相学を、自ら考え、学び、実践していったと思います。知られるように、敬虔なクリスチャンでしたが、読書家で、和洋はもとより、漢書をよくし、その影響が強かった人です。大平さんは、その日のために、宰相学を学び、実践し、その実現に務めますが、天命到らず、到達しなければ、それはそれで、歴史の命ずるところと、思われていたように思います。だが、歴史は大平さんを必要とした。第二次オイルショックにともなう国際・国内経済は、従来の政治の手法にないものを求めたのです。大平さんが総理の座についたのは、国民の願いであり、歴史の必然であったと思います。

—— 大平内閣が成立すると、田中さんが内閣官房長官に任命されましたね。

田中 大平政治は、寡黙で、待ちの政治です。その寡黙政権のスポークスマンに、私は任命されたのです。総理執務室で、初めて、総理として……官房長官として……対面した時、大平さんはかたわらの地球儀を指しながら、私に「六さん、これからは二人とも地球儀を頭に置き、腹につめていこう

歴史の使命を果たした人

ぜ」と言ったのです。

感動が私の体の中を走りましたね。大平さんの周辺には政治家は多くいます。先輩、同期、友人、後輩。「人事は、個人的には本当にせつない」と言いつつ、その中から初めての政権の女房役に私を選んで下さったわけです。私はこの人の手となり足となり、不肖ながら、足らざるを補い、かぶるべきときに泥をかぶろう、と決心しました。私にとっても、初めてのポジションであつたし、いま振り返ると、当初は多少の気負いもあつたように思いますが、とにかく寡黙総理のよさを国民のみなさんに理解してもらいたい一心でした。

——キャッチフレーズは、「信頼と合意」でしたが……。

田中 派手なキャッチフレーズは、「信頼と合意」という基本理念を除いて、避けました。初記者会見でも大平総理は、「人（総理）が変われば、手法も変わる。性急を期待せず、みなさんも、いっしょに育てて下さい」と静かに言われた。これまでのように、初会見で、派手なうたい文句を期待していた記者団は、期待を外されて、とまどい気味ですらあつたと思います。

大平さんは、明治以来、戦後までの、ナショナルな価値観がなくなつたわが国の価値観を創造し育てる最小単位は家庭であり、やがては、国民の合意にもとづくものとして、成長させたいと考えていたのです。それを大平さんは「家庭基盤の充実」という形で表現しました。「環太平洋構想」といい、「田園都市構想」といい、「行政改革」といい、大平政権の政策の柱の一つ一つは、地味だが、大平さんが政界に入ってから、醸成し、止揚し、練りに練つた政策が、情熱の静かな炎となつて燃えているものだったと思います。

実 —— 出だしから、あまり派手ではなかった……。

就 田中 財政再建、資源対策、対外政策……。前政権に起因する抜本的政策転換で、辛い遠い道でしたが、自己弁護を語らず、耐えに耐えて、ときに鬼気を感じるほどに、大平総理は献身したと思います。「六さん。われわれの苦勞は、国民のみなさんが、安心して日常生活をすることで実るんだよ。去きようも太陽が東から昇って、西に落ちた。あしたもきっとそうだろう。……そう思って、だれ一人

疑われない平和な日本を運営しようよ」 大平総理はよく、そう言っていました。

—— 外交面ではどうでしたか。

寡黙政治の姿勢をくずさなかった

田中 アメリカ訪問でも「形式的なアメリカ詣では必要ない」と言っていたが、アメリカのリーダーシップが低下しつつあるのではないかと思える時期にいたると、直ちにアメリカへ飛んで、カーター大統領を激励したのです。「大統領、あなたは自由諸国のリーダーとして、自信を持ってがんばりなさい。この大平が、必要とあれば、必ず、お役に立ちましょう」と言ったのです。渡米に際しても、私に、「アメリカでの私の行動を、事実以上に伝えてはいけない」、けっして宣伝に類するな、と釘をさして、寡黙政治の姿勢をくずさなかったですね。

—— 『純牛総理』との世評もありましたね。

田中 しかし、閣議での閣僚の発言は、自由活発でした。大平総理は「私は日本国憲法にしたがって

諸君を任命した。任せただから、力いっぱいやりなさい。責任は私がとる。もし、わからなければ教えてあげるし、大局に間違えがあれば私が正す」と言っていました。マスコミはここでも、「リーダーシップを欠く、したたかな鈍年首相」と酷評しましたが、私は大平総理こそが、総理としてのリーダーシップを培い、実践した人だと、確信しています。亡くなられたが、当時の真田法制局長官は、「私のお仕えた首相の中で、大平内閣が一番、自由活発で、和気あいあいの閣議でした」と評していました。

——行政改革も唱えたと思いますが……。

田中 大平総理は財政再建の一環として、行政改革を実行しました。「わが国の財政再建のために、能率的な政府をつくるため、私も政府も、国民のみなさんと苦しみをともしして、あすの希望につらねたい」ということだったが、マスコミは、一斉に、「行政改革は不徹底」と、糾弾に近い論評をかけた。大平総理は、ここでも反論をせずに耐えたのです。

「政治のできるものと、できないものとはつきりさせて」、経済の流れも、流通法則にそった民間主導にして、行政改革にむすんだ政策が適切であったことが、いま、自由経済圏で、わが国がもつとも経済が安定していることで示されていると思います。戦後、わが国の総理で、行政改革を唱えた人は数多いが、大平総理は、それを実行に移した数少ない総理の一人でしょう。「国民とともに苦しみ、国民とともに希望を呼ぶ大平・行政改革」は、一段、二段、三段と、段階的に用意されていたように思います。

——昭和五四年（一九七九年）六月の東京サミットの時も議長国ではあったが、石油の問題で苦勞されましたね。

東京サミットの議長国として苦勞

去 華 就 実

田中 東京サミットの時、大平総理は、食事ものに通らぬほど苦勞されました。わが国が、毎年六%の経済成長を達成するに必要な一日当たりの必要重油輸入量を、先進七カ国首脳とEC代表の了承を得るため、内閣も、外務、大蔵、通産など担当官庁も、料理担当者も、接待サービスにあたった人も、運営にあたったすべての人が一致協力したのです。会期の六月二十八日、二十九日の二日間の討論の末、昭和六〇年（一九八五年）に輸入できる重油が、一日あたり六三〇万、六九〇万バレルという数字を得たのは、大平総理を中心にした、水ももたらさぬ協力の実りだったと思います。

——日本の要請に最も反発したのは、フランスのジスカールデスタン大統領だったといわれていますが……。

田中 そうです。予期に反して国別割り当てを提示したのがジスカールデスタン大統領でした。会議場の迎賓館をベルサイユ宮殿の亜流だと、大統領は冷ややかに評したのですが、皇室のもてなしに心をやわらげ、皇居の緑の日本庭園に関心を寄せ、最終日、大平総理招待の食事の席で、最終的に賛意を示したのです。

——それはどのようにして……。

田中 「日本の味を」という大平総理の発意で、総理のごひいきの店に依頼してつくられた日本料理の粋をお出ししました。各国首脳はもちろん、ジスカールデスタン大統領も、「すばらしい、すばらしい」を連発したが、大平総理の箸は、いっこうにすすまない。大統領は気にして「大平総理、あ

あなたは、どうして、このすばらしいおいしい料理を、お食べにならないのですか？」とたずねました。大平総理が「わが国への重油の割当量のことを考えますと……気が重くてのどに入りません」と答える。「そんなに思い悩まず、どうぞ味わって下さい。十分に」と大統領。少しあつて大統領が「それは、いま、解決しました」と言いますと、総理の顔が、緊張から笑顔に変わった。席のムードががらりと変わったのです。破顔一笑、箸がさかんに動くようになりました。私は、「やったぞ、やったぞ」と、心の中で叫んだのです。

——そして昭和五四年（一九七九年）一〇月に総選挙があり、その選挙での敗北 自党内の抗争ということになりますが……。

田中 大平総理は、あれほど歴史の使命に耐えてきた人だったのですが、昭和五四年の総選挙の自民党の敗北につづく、低次元をはいずり回るような党内抗争（四十日抗争）は、ときに、総理を挫折感に追い込んだのです。私は、この人をおいて、いま、わが国のリーダーはいないと思い、考えられるあらゆる手段、手法を、昼夜兼行で実行して、総理を激励し、大平政策を前進させるようにしました。

翌五五年五月五日、前回の総選挙後につづく党内抗争は、野党提出の内閣不信任案を、結果的に可決させてしまったのです。当時、私は、官房長官から筆頭副幹事長に回り、党務をあずかっています。閣議の席上、閣僚は一致して総理に解散を進言し、大平総理は、わが国憲政史上、初めての衆参両院同時選挙を決断したのです。

——大平総理が倒れたのは、その同時選挙の公示日でしたね。

大平総理が同時選挙の公示日に倒れる

実 就 華 去

田中　そうです。大平総理自身の政権と自民党の命運を賭けたその日は、さわやかな五月晴れでした。総理は午前十時十五分、党本部で出陣式をすませ、東京地方区の安井謙候補のために、新宿駅前で第一声を放ったのです。私がテレビのニュースで見た総理は、声を張りあげ、ガッツポーズをとり、たいへん熱のこもった演説でした。あとでご本人から聞いたところでは、途中で胸が苦しくなりましたが、がまんして続けたということです。党本部に戻って昼食をとったのですが、この時には、苦しくてどうにもならなくなり、横になってマッサージを受けたそうです。周囲の者には体の異常が十分にわかるほどだったが、政権の行方を賭けた公示初日でもあり、午後の日程を強行し、横浜市内の三力所の会場で演説をやったわけです。

——途中から、とても苦しそうだったと聞きましたが……。

田中　その日の午後になって、大平総理は疲労がしだいにひどくなり、演説場所の移動には党の大形宣伝車には乗らずに、総理の専用車を使い、車の上り下りにも、付き添いの秘書官や近くの人たちが数人がかりで総理の尻をおすなど、手を貸さなければならぬほどだったそうです。それでも総理は気丈に、「大丈夫、大丈夫」と言い、日程を消化した。その場に、伊東正義官房長官か森田一秘書官か伊藤昌哉君（元池田首相秘書官）か私の、だれか一人が居合わせていたら、そこまで無理はさせなかつたらうと思います。これは永遠に残る悔いですよ。総理は、突然の心臓発作に襲われ、卒倒するほどの苦しみを味わいながら、演説日程を消化し、党総裁としての務めを果たしたわけです。壮絶

な政治家の生きざまですな。

——そのころ田中さんは、どうされていましたか。

田中 私は、総理の病気のことなどつゆ知らず、福岡県地方区の党公認候補の応援に、県下を走り回っていました。ようやく最終便で東京に戻り、自宅で風呂に入って演説行の疲れをいやし、一息ついて夜食をとっている時でした。突然、電話が鳴り受話器を取ると、総理の私邸から「至急来てほしい」との連絡、つづいて、伊東内閣官房長官からも同様の電話、なぜか胸騒ぎが走りました。

選挙に関係して急用ができたのだと、自分自身に言いよかせながら、長男の運転する乗用車で総理の私邸に駆けつけました。門を入ると、寝台車がとまっている。ただことではない。飛び込むように玄関の中に入りました。総理は六畳間の寢室に静かに寝ていました。部屋には虎の門病院の山口（洋）医師らも来ており、入院するばかりの状況だったのです。総理は私が横に座つてのぞきこんだのを知ると、弱々しい声で「ああ、腹が減った」と言つたあと、「心配するな」と言う。ほかにもしやべつているが聞きとれない。わかつたのは、何度も手を握るたびに繰り返す「心配するな」という言葉だけ。手がしっかり握られるたびに、私のほおを熱い涙がつたわってポトポトと音をたてる。思わず、「神よ、どうか助けたまえ」と祈りながら、総理の手を強く握り返したのです。

——そして虎の門病院に入院、ということになりますね。

田中 苦しさの中にも、総理の頭からは選挙のことや、今後の政局のことが離れなかつたようです。「安静が必要です」と看護婦に制されて、話はあまりできなかつたが、総理は何も言わずに右手の人差し指を高くあげた。この人差し指の意味は今もわからない。選挙前の分裂寸前の状態から一転して

実党内の一本化ができたことを喜んだのか、野党との工作が進み、話し合いの下地が整ったことを示すのか。数日前に、私に「どうして福田や三木は、おれをいじめるのかな」と嘆いた姿が思い出されて、華また胸が詰まる。あれもしゃべりたい、これも語りたいとさまざまな思いが走って、総理と話を進めようとしたが、看護婦にうながされ、後る髪を引かれる思いで寢室を出たのです。

医師団の診察の結果、虎の門病院に入院することが決まり、もちろん、三一日に予定されていた熊本市での街頭演説をはじめ、当面の日程は全部とり止め。総理は午前零時半に、迎いの寝台車に運ばれて入院されました。

担架に乗せられて玄関を出る総理は、じっと目を閉じ、両手を前で合わせて合掌していました。私は合掌の姿が気になって仕方がなく、また、ひとしきり涙にむせんのです。

——直前までのスケジュールが、あまりに過密だったと思いますね。

超多忙なスケジュールをこなす

田中 大平総理はすでに七〇歳でした。そのガツシリした体からさほど年齢は感じさせていなかったが、ここ二カ月あまりのスケジュールは超多忙と言っていいほどの過密ぶりだった。参院選を控えていたこともあり、三月下旬からは毎週土、日曜日は、全国各地で開催された党の政経文化パーティーに出席し、土、日の休養はまったくなかったのです。

四月三〇日から五月一日の間は、カーター大統領を激励したアメリカをはじめ、メキシコ、カナ

ダの三方国を歴訪。その間、ユーゴスラビアのチトー大統領の死去ともない、予定を変更して、遠く首都ベオグラードの国葬に参列しました。

こうした肉体的な疲労に加え、野党の参院選の駆け引きで提出された内閣不信任案が、党内抗争によって本会議で可決されて解散、総選挙を断行した異常事態と心労が病気を誘発したのは、だれの目にも明らかだったと思います。

——入院直後の発表は、「一過性の不整脈」ということでしたが……。

田中 記者団に対しては、「過労」のための「一過性の不整脈」ということで発表しました。医師団は、回復に目鼻がつくまではかなりの日数がかかると診断し、それを受けて、伊東官房長官は「私の気持ちとしては、自民党の了解が得られれば五、六日、休養させたほうがいいと思う。精密検査をして何日ぐらいになるか決めたい」と会見で語ったのです。

私たち総理側近は、つとめて平静を装っていたが、政局は混迷の道を踏み出したと感じざるを得なかったのです。大平内閣は、保革伯仲国会の下での政局運営のむずかしさ、苦しさを、耐えに耐えてきた。だから、衆参両院で安定多数を獲得することは、内閣の至上課題だった。総理も、新人や選挙に弱い候補者のことを非常に心配していた。総理の意を体し、私は自分の選挙は願わず、可能な限り他の候補者の応援をして回ることになりました。

——田中さんは、猛烈なスケジュールで遊説をして回ったわけですね。

田中 そうです。候補者の応援を終えて、夜行列車でとんぼ帰り、朝早く東京に着き、そのまま虎の門病院へ直行する。総理はいびきをかいて眠っている。プレスへの発表では、総理は食事をとった

実り新聞を読んだりしていることになっていたが、実際はそんな状態ではなかったのです。総理はたとえ一週間程度、休んでも選挙遊説に出られるような状態ではなく、六月二〇日から二三日に予定されているベネチア・サミットには出席できそうにないと思われました。医師団は、夕方の記者団への発表へ向けて、どう公表するか、政治的配慮と医学的配慮との狭間の中で、微妙なところで悩んでいるようでした。

六月五日に熊本から伊東官房長官に連絡をとると、「総理は回復の兆しが著しい」と声が明るかったのです。私は多少ほっとすると同時に、さらに回復が早まるよう神に心から祈りました。

——病室での大平総理は、どうでしたか。

田中 私は一つの遊説旅行が終わると、そのつど、その足で病院へ直行しました。大平総理は自分で動けないため、私の情報を心待ちにしていたのです。応援旅行で得た私の実感は、衆参両院の同時選挙に両方とも過半数を占める可能性が大きいということでした。「総理、この同時選挙は天の与えてくれた絶好のチャンスですよ」と報告をすると、非常に喜んで聞いていた総理の明るい笑顔を、いまでも思い出します。

九州を回って病室を訪れた時のことです。総理が多少心配げに「お前は、全国各地を飛行機に乗って飛び回っているが、そんなに何回も飛行機に乗って墜落事故でも起きたらどうするか」とたずねました。私が「総理もご存じでしょう。私は海軍の飛行将校ですよ。空が一番好きで、六月の紺碧のぬけるように青い空を見ていると、さまざま苦労も忘れますよ」と、冗談まじりに答えると、総理もにつきりほほえみました。その笑顔に魅せられて、私は思わず、海軍時代からの愛唱歌『ダンチヨネ

節』を小声で歌ったのです。静かな病室にメロディーが流れる。「沖のカモメと飛行機乗りはヨノどこのみ空でネノ果てるやらダンテヨネー」。

——「君は『無法松の一生』がうまかったなあ」と総理がいわれるので、小倉生まれで玄海男の一生を、セリフを入れて夢中で歌いました。許された時間は切れて、別れの時がきたのですが、総理はいつものように私の手を握り、「もう帰れ。さようなら」と言いながら、握った手はいつこうに放そうとはしなかったのです。

ベネチア・サミットが大きな関心事

——ベネチア・サミットに行けるかどうか、大きな関心事になっていましたね。

田中 その頃、最大の課題であるベネチア・サミットに行けるかどうかは、極めて疑問でした。医師団は、ベネチア行きには反対でした。この問題で、私はしばしば主任の山口医師と論争しましたが、六月七日、山口医師は「私たちは、いい加減な治療はできません。現在の総理の病状では、サミット行きはとても無理です。出発を強行すれば、生命の保障はできません」と、きっぱり告げたのです。私は「政治家、なかんずく総理たるものは、条件の良し悪しにかかわらず、時として医療に優先して働かなければならない場合があるのだ」と反論しました。

いまにして思えば、少し強すぎた言葉だったかも知れない。しかし、政治家は、洋の東西を問わず、自分の健康を顧みずに国のため、民族のために働かねばならない時がある。第二次世界大戦中、ヤル

夕会談に出席したアメリカのルーズベルト大統領も、その数カ月後には心臓病で死亡している。人間の生命はいつ果てるともわからないし、いつ死んでもいいような気持ちで政治に当たらなければ十分な働きはできないと思います。

—— 政治的にみても、サミット出席は必要という判断ですか。

田中 サミット行きについては、「総理の年齢から考えても、ベネチアに行くところこそが政治家としての務めである。それは大平内閣がつづくことを意味し、国民の幸せにつながる」というのが私の主張でした。サミットに出席できないということは、国際政治の重大局面で総理の役割を果たすことができないことを示すもので、致命的になると判断したためです。この点は、森田一秘書官も同意見でした。しかし、まだ七日の時点では、総理は楽観視していた。新聞やテレビのニュースが十分入っていないこともあって、サミットに行かないでも、何ら選挙後の政局運営に支障はないと思っていたようです。

こうした総理に対し、私は森田秘書官ともども、ベネチア行きの必要性を力説して、「総理自身がベネチアに行くためにも、精神を振るいおこして、この病気を克服しなければなりません」と、数回にわたり説得しました。また山口医師たちには、「あなたたちも、サミットに間に合うように総理の体を整えてほしい。足に靴を合わせるのではなく、靴に足を合わせてほしい」と強く要請しました。サミット行きを前提として、森田秘書官と協議し、飛行機内の休憩設備、寝室には万全を期する、医師団を多数同行させる などの点を決めたのです。しかし、医師団はなかなか納得せず、総理のサミット行きには同調しませんでした。

——その頃、退陣説とか後継者論とかが、ぼちぼち始まっていた……。

田中 総理は政権を維持することに意欲的だったが、党内では、さまざまな思惑がとび交い、後継者をめぐる動きが始まっていました。私は開票日には、総理は党本部に座って、デンと構えておく必要があると話すと、事態をかなり楽観視していた総理も考え直した様子で、「俺のあとに誰がいるか。俺は辞任する意思はない」とキツパリ言って、私の手を握りました。総理への説得は、北海道、東北を回って帰京した十日にも行ったのですが、選挙の情勢としては、公明党、社会党に活気がなく、共産、民社、自民が大いに振るっていること。また、このままいけば、衆参両院とも、わが自民党が勝つ方向にあり、総理にはまだまだ、「つき」があること。あとは、いかにしてサミットに行くかが課題 などを報告しました。

サミットに関しては、「政治家、特に総理大臣として、世界の頂上会談に行くことのほうが、座して死を待つよりよい。それが『男子の本懐』であることは間違ない」と主張して、総理の決意をうながしたのです。

——亡くなる前日にも大平総理に会って、話をしておられますね。

田中 総理が亡くなる前日、すべてが好転したかのようにみえました。鹿児島、宮崎での応援演説を終えて病床に戻ると、総理が明るい声で「六さん、ベネチアへ行けるよ」と言ったのです。私は、例によって、冗談を言っただろうかと思っていました。間もなく山口医師も飛んできて、「大丈夫。総理は行けます」と言う。手はずは着々とすすんでいました。大来佐武郎外相の日航機の手配も済み、外務省からきている佐藤嘉恭秘書官は、十二日夕刻の飛行機でベネチアに出発するよう

実準備していました。佐藤秘書官は、首脳会議が開かれる会場を検分して、階段が何段あるとか、宿舎と会場の配置など、総理の体に無理がかからないよう、詳しく下調べをするよう命じられているのでした。

去 胸が高鳴り、うれしさが、体からあふれ、小躍りする思いでした。私はせきこんだように、総理に「明日七時までには、総理のベネチア行きの声明書を書いてまいりますよ」と話しかけました。「おお、そうか」 短くはあったが、総理の声にも明るいいびきがあったのです。だが、これが、私が半生をかけて私淑し、政権の成立を願った大平総理との最後の会話になりました。「おお、そうか」あの声は、いまも私の心にあるのです。

—そして、田中さんは声明書の起草にかかるわけですね。

“幻の声明書”を起草する

田中 私は自宅に戻り、ひと眠りしたあと、午前三時に起床、机にむかいました。しばらく黙想のち、声明書を一気に書き上げたのですが、この声明書は日の目を見ず、“幻の声明書”に終わってしまいました。“幻の声明書”の案文は、こういふものです。

「私は私の健康に対する医師団の意向をも参考にして、イタリアで開かれる先進国首脳会議（ベネチア・サミット）に出席する。私のこの決意は国内の政局の動向とは関係はない。昨年、私が主催した東京サミットは、エネルギー問題をはじめ懸案の諸問題の合意がなされ、成功のうちに終わった。

今回のベネチア・サミットでは、先進国間の経済問題に対する協議、調整もさることながら、新たな国際問題として起きたソ連のアフガニスタン侵攻や、深刻化した米・イラン紛争問題などに対するサミット参加諸国がどのように対応するか、政治問題が論議され、従前にみられない重要な会議となるであろう。私はいま、衆参両院の同時選挙を断行し、国内政局の安定を期し、国民の皆様はその判定をお願いしている。この際、国を留守にすることは国民の皆様や同志諸君に対して申しわけない気持ちに立つ。しかし、わが国の国益をふまえ、日本の平和と世界の平和に連なるこの会議に出席し、わが国の立場を主張する。国民各位のご了承を期待する次第である」

——幻の声明書になったのは残念なことでしたね。

田中 声明書を書き終えようと最後の行にかかったとき、木村貢秘書官から電話が入りました。受話器から伝わる木村君の声が、ふるえているのです。

「総理がだめです」

「何がだめなのか。総理がサミットに行けなくなったということか」

「総理が危篤です」

「キトク……」私は一瞬、息をのみ、体がくずれそうになるのを、ようやく気力で支えました。

長男を起こし、車を運転させて病院に駆けつけると、六階の病室には、総理夫人はじめ家族全員が呼び集められていました。寝台の上の総理の顔に手をあててみるが息は当たらない。すでに三時二十分に息は切れたという。ただ、心臓だけはかすかに動いているようで、横の心電図はわずかに動いています。

実　　それでも、二人の医局員が総理の胸の上に乗って人工呼吸を試みていました。だが、その激しさに就　私は思わず、「もうやめろ。こと切れているではないか」と大声でどなったのです。総理の肋骨が折　れはしまいか、という恐れに見舞われたからです。

去　　——大平総理が亡くなった時の気持ちは、どうでしたか。

田中　人工呼吸をやめると、心電図もストップし、総理は文字通り不帰の客となりました。私と森田秘書官は、男泣きに泣いて、二人で総理の遺体に取りすぎりました。森田秘書官は、手元の櫛で総理の頭をなでつけ、私はまだ温かさの残っている手足をさすっていたが、総理の手を握りつつ、総理を死に追い込んだいろいろいな、どろどろした政争の一つ一つが走馬燈のように思い出され、ああいうことがなかったならば、総理の死もこんな早くなかっただろうと、すべてが悔やまれてならなかった。私は総理の手を握りながら、このあだは必ず取ってみせます、と誓いました。当時は茫然自失、理性もなく、いま思えばまったく自棄にも等しいことだったのです。

——仇は必ずとる、という気持ちは、その後どうなりましたか。

内閣・自民党合同葬儀での感動

田中　私は七月九日の内閣・自民党合同葬儀の時点で、これらの恨みつらみは吹っ飛んでしまったのです。葬儀の日は、朝から泣き出すような曇り空でしたが、いつのまにか雨と変わり、総理の死を天も悼むかのように、一時は激しい雨足となって、多くの参列者の足をとどめたのです。しかし、私

歴史の使命を果たした人

がもつとも感動したのは、各国代表者の参拝に続いて、岸信介、田中角栄、三木武夫、福田赳夫の元、前首相らすべてが、大平総理の遺影に向かって深くと頭を下げた姿です。四十日抗争の政争が苛烈であつただけに、印象は強かつたですね。

とくに私が感動したのは、最後に約四千名に近い庶民の人々の参列者のことです。老若男女、学生も大学生から幼稚園児まで、老人も若い人も、みな雨にそばぬれて、長い列をつくっていました。なかには、千円札を入れた御仏前、御香典を供えた人も数知れない。同時に、自分の家で焼いたパイだといって菓子を上げたり、あるいは自分の家の庭に咲いた花を献花する人、あるいは自分がかいた絵だといって油絵を供えていく人もいました。私は、名もなき民の心をしみじみと味わうと同時に、総理の死後、まだなま温かい手を握りながら、あだ討ちにも似たことを誓つた諸問題が一度に吹き飛んだのです。

——同時選挙も、大平総理の死ということがあつて、自民党の圧勝で終わったわけですが……。

田中　そうです。衆参両院で自民党が圧倒的な議席を獲得できたのも、総理の死が半分以上大きな原因となつたと、いまも確信しています。総理の死がなかつたならば、衆参両院の、このような安定多数を獲得することはできなかつたでしょう。大平首相は、自分の死をもつて政局安定を導いたと私は確信しています。

合同葬儀の時、私は、総理の大きな写真に向かって、「これでいっさい水に流しましょう。不評判であつたあなたが、これほど多数の人々のお参りを受けようとは、私も想像しなかつたし、あなたも想像しなかつたでしょう。大衆に根を下ろし、大衆とともにあつたあなたの心、あるいはあなたの名

声が、いまこそ花が咲き、実がみのつた。これでいつさいの政敵、あるいはあなたの心を苦しめたであろう人々に対する私の恨みはすべて消えた。あなたはやはり大衆の中に生まれ、育ち、大衆とともに散ったと私は確信する」と告げたのです。政治家の名声というものは、「棺覆て知れる」と言った原敬の言葉が、しみじみと思ひ出されました。

(このインタビュアーは、田中六助著『大平正芳の人と政治』(朝日ソノラマ)の第一章「寡黙にして、耐え、壮絶に死す」を編集委員が構成したものです)

田中六助(たなか・ろくすけ) 一九二三年、福岡県生まれ。早大政経学部卒、日本経済新聞政治部次長、池田首相秘書をへて、六三年以後、衆議院議員に連続八回当選。宏池会会長交代劇では大平会長実現の急先鋒として活躍し、第一次大平内閣の官房長官として初入閣、鈴木内閣の通産相、自民党政調会長二期、中曾根内閣の党幹事長を歴任した。党内実力者のパイプ役として活躍した。八五年死去。著書に『大平正芳の人と政治』、『再び大平正芳の人と政治』、『保守本流の直言』などがある。